

mitsui HOME EYE

AUTUMN 2014 NO.86



暮らし継がれる家

 **三井ホーム**

おかげさまで


ANNIVERSARY

京和傘の継承と進化に挑む

日吉屋・西堀耕太郎さん

悠久の歴史が刻まれ榮えてきた京都には、雅な文化のもとで伝統あるモノづくりが大切に守られてきた。竹と和紙が織りなす、素材さの中に気品の漂う京和傘もそのひとつ。繊細な手仕事から成るロクロや竹骨を、熟練の技で丹念に組み上げる。丁寧に貼った和紙に、手際良く亜麻仁油を染みこませて乾かす。京和傘の伝統と職人の技に惹かれた西堀耕太郎さんは、和傘づくりの技を継承しながら、新たな創造へと挑み続けている。



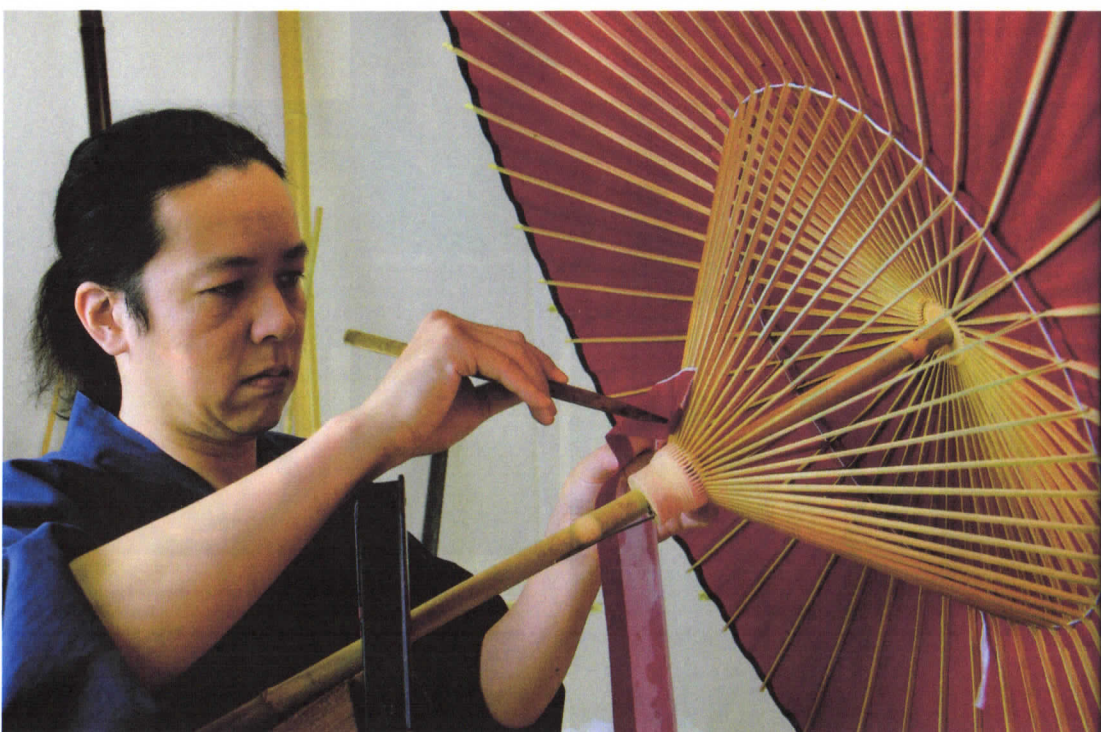
和傘の美しさと可能性に 自然と導かれた職人への道。

和傘が庶民に普及したのは、江戸時代中期以降のことである。はじめは大坂と京でつくられ、後に岐阜や江戸から全国各地に広まっていく。気品のある「蛇の目傘」をはじめ、日常使いの「番傘」や舞踊で用いる「舞傘」屋外の茶席で使う「野点傘」など。熟練の職人たちによって多種多様な傘が生まれ、江戸時代には大輪の和傘文化が花開いた。竹の骨組みが放射状に広がるシルエットや、光を透かした色彩の美しさなど、そこには伝統が育んだ洗練された機能と造形の美が息づく。

江戸時代から続く京和傘の老舗「日吉屋」五代目当主の西堀耕太郎さんは、かつてそうした和傘特有の美に思いがけず出会い、和傘づくりの世界へ足を踏み入れたという。「和歌山県新宮市に生まれた私は以前、地元の市役所観光課に勤めていました。そのとき、たまたま結婚前に妻の実家だった日吉屋に遊びに行き、店頭で番傘を手にして開いたところ、その美しさにすっかり魅了されてしまったのです。さらに、エリ

ザベス女王が来日した際の古い雑誌を見せてもらい、桂離宮で催された野点の席で使われた傘が日吉屋でつくられたと知り、これは凄いなと思いましたね。しかし、その頃はすでに和傘をつくっても売れず、京和傘の店は次々に廃業し、日吉屋一軒だけになっていました」と西堀さん。かつて全国で二七〇万本も出荷されていた和傘は、洋傘の普及とともに売れない時代となり、すでに商売としては成り立たない状況であった。京都で伝統ある和傘の素晴らしさと厳しい現実を知った西堀さんは、その後「何とか妻の実家の手助けができないものか」と考えをめぐらせていたという。

「当時はネットが普及しはじめた頃で、勤務先でも導入を検討していたため、早い時期からインターネットに接していました。そこで、これなら自分でも京和傘の魅力をアピールすることができると思い、趣味で日吉屋のホームページを立ち上げたのです。すると最初の月に番傘が一本売れました」





1. 和傘の機能から着想を得た、開閉角度が自在に調整できる照明「MOTO」。2. 店内に吊された、色とりどりの和傘照明「古都里」。3. 店内に置かれた伝統的な蛇の目傘。4. 歴史ある看板と縦格子が街並みに溶け込む日吉屋の外観。



伝統は革新の繰り返り。 だから止まらず前へ進む。

「公務員を辞めて和傘職人になると言い出したときは、私の両親も妻の親も大反対でした。でも可能性があると思いましたし、モノづくりがしてみたい。何代も続いた伝統的な仕事はやり甲斐もあるし、京和傘の店が無くなってしまおうのとはとても残念に思えたのです。失敗したところで、またやり直せばいいじゃないかという気持ちもありました」

こうした考え方は、高校卒業後の留学体験によって培われたという。「カナダでは祖国が武力紛争中のパイト仲間と知り合いましたが、彼らは国に戻ってもやり直せない。でも日本は平和で失業率も低く、失敗しても何度でもやり直しがきくと痛切に感じました」と回想する西堀さん。海外では日本について尋ねられることも多く、改めて日本の伝統の良さを再発見し、後日はじめて和傘を見たときの感動にもつながった。

五代目として店を継いだ後、周囲の不安をよそに和傘の売り上げは順調に伸びていく。だが、普段使い

として伝統的な和傘を買う人は少ない。このときすでに先を見据え、日常生活で普通に使える商品をつくるべきだと考えていたそう。

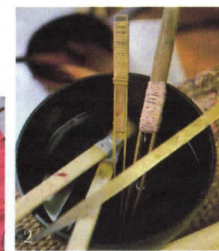
「和傘の歴史を振り返ると、和紙づくりや木工技術の向上にとともに、時代ごとに少しずつ進化を遂げてきました。つまり和傘は当時の工芸技術の最先端だったわけですね。それがいつしか進化を止めてしまい、京和傘の店は一軒だけになってしまった。歴史を見てわかるように、伝統とは革新の連続で、立ち止まっていけないのだと思います」

こうした考えから生まれたのが、和傘づくりの技術を活かした照明器具である。和傘は仕上げに戸外で天日干しを行うが、その際に目にした傘を透過する光の美しさにヒントを得たという。はじめは和傘そのものの形状であったが、プロのデザイナーとのコラボレーションにより洗練された「和傘照明」が生まれた。二〇〇八年からは海外でも販売され、すでに世界的な評価も得ている。

京和傘と出会い、消滅しかけた伝統の技を継承し、グローバルな「老舗ベンチャー」へと発展させた西堀さん。これからは職人技を時代に活かす、新たな創造によって伝統を守り続けていくことだろう。



1. 日吉屋は二代目西堀与三郎の代に、皇女ゆかりの尼寺で人形寺として名高い宝鏡寺の門前に店舗を構えた。2. 店舗の周辺は表千家と裏千家の両家元の庵があり、茶道具の店も軒を連ねる。日吉屋は両千家から代々、野点傘の注文を受けてきた。

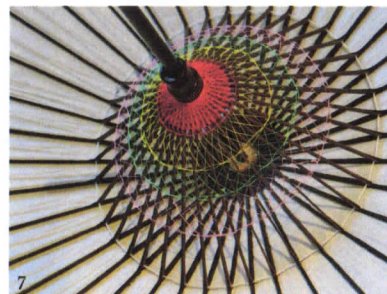


1. 和紙を貼る糊を調合する西堀さん。糊の原料は戦後にワラビ粉からタピオカ粉に変わったが、使う分だけ調合する手間は変わらない。2. 江戸時代から受け継がれたものもある。年季の入った道具類。3. 手元紙を竹骨に貼っていく工程では、又べらという専用の道具を用いる。4. 防水のための亜麻仁油を塗る西堀さん。亜麻仁油は一晩かけて和紙全体に染みこんでいく。5. 傘の開閉を可能にする木製の口クロ。この部品を制作する工房も全国で一軒だけになってしまったそう。6. 和傘の骨組みには、岐阜の真竹が使われている。7. 蛇の目傘などに用いられる飾り糸は、傘の内側を華やかに演出する。

その後もホームページのアクセス数や来店者が増え続け、西堀さんはネットによる需要の掘り起こしと、和傘の可能性に手応えを感じ取った。だが、最も面白くて楽しかったのは、和傘づくりだったという。

「模型づくりが好きだったせいもあり、妻の実家へ遊びに行く度に職人さんの仕事場を見学し、和傘づくりを習いました。わからないことは聞けば親切に教えてくれますが、手取り足取りというわけではないので、作業をビデオで撮ったり、ノートに要点をメモしたり……。やりたければ好きにやってみようと言われ、傘の材料を持ち帰って、ビデオやメモを参考に試行錯誤しながら組み立てました。随分と失敗も重ねましたが、自分で傘を完成させたときは喜びもひとしおでした」と語る西堀さん。仕事を終えた金曜の夜に4時間かけて京都へ行き、土日に和傘づくりを教わり、日曜夜に自宅へ戻るという生活を続けていたそう。

そしてついに奥様の実家が店を畳もうかというとき、後を継ぐことを申し出る。「偶然に和傘と出会い、ネットの普及が和傘づくりを後押ししてくれました」という西堀さんにとって、傘職人になることはまさに必然だったのかもしれない。



Present

5 ページに掲載の和日傘をプレゼントいたします。詳細は、38 ページをご覧ください。